



まじめに向き合う

アトム共同保育園 野中 泉

事務室に担任のまるちゃん（丸山保育士）に連れられてきた5歳の男の子。真っ赤な顔でぎゅっと口を一字に結んでいます。まるちゃんによると、どうやら友だちに「人殺し」と怒鳴ったらしいのですが「なんで、そんなことをいったの？」と問いただす大人にも「人殺しっていわれて嫌やった」と憤慨する友だちにも、何も答えずただ黙っている。しびれをきらしたまるちゃんに「のなちゃん（野中園長）に話きいてもらって」と連れてこられたのです。

私は「アトムに人殺しがいたの？」とふたりきりになった彼に尋ねました。ぷんとそっぽを向いている。「それは、大変やから、警察に電話するわ。どんな人殺しがいたのかおまわりさんに話してな」というと、困った顔になりぶんぶんと首を振ります。「人殺しはいなかったの？」黙っている。「人殺して何？」まだ、黙っている。「知らんのに、人殺していったの？」私をにらんでずーっと黙っている。きっと、深い意味もなく何気なく言ったひとことで、こんなに突っ込まれて困っているのでしょう。「わかった。のなちゃんが、人殺しを教えちやるわ。でも、あなたが『人殺し』になったら、お父さんお母さんも悲しいと思うから、のなちゃんが『人殺し』になる」そう言って、私は彼を事務室のとなりの調乳室にひっぱっていき、包丁を出して真剣な顔で包丁を彼にむけました。「痛いと思うけど、がまんしてな。これで、これからあなたのお腹を刺します」と、初めて大慌てで「いやや、無理、無理。そんなん嫌や怖いわ」「でも、人殺してごういうことやで。あなたが言ったのは、こんな怖いことやけど、それが言いたかったんか」。するとぼろぼろ涙を流しながら「違う、違う、俺がお茶飲んでる間に砂場の山を、あいつが崩しそうやったから、嫌やったんや」。「そんなら、そういえば、よかったんやわ。『人殺し』はその気持ちと違う言葉や。人が人を殺すのは、とっても怖いことや」。

その後、誰に何を言うといいか自分で考えてから戻ってとだけ言って待っていると、しばらくひとりで膝を抱えて考えた後、『人殺し』と言ってしまった友だちのところに行って「さっきは、こわいこと言って、ごめん」と泣きながら謝っていました。夕方、迎えに来たお母さんに一部始終を話して、「ごめんね」と謝りました。子どもに包丁を向けるなんて怖がらせることじゃなくても、もっといい伝え方があったかと思ったからです。でも、お母さんは「いやいや、ありがとう。そんなに真剣にむきあって話してくれてありがたかった」と、そう言ってくれました。

彼だけでなく、「殺すぞ」とか「死ぬ」という言葉を使う子どもは時々出てきて、私たち大人はドキッとしてしまいます。でも、そのほとんどは、テレビなどで聞こえてくる言葉をよくわからずに口にしていただけで、大人が思うほど深い意味を言葉にのせてはいません。使うたびに周囲がうるたえたり、びっくりするその反応がおもしろくて、何度も使うようになる子もいますが、言葉の響きだけにあまり神経質になりすぎる必要もないと思います。それよりも、「その言葉」に置き換えてしまった気持ちに向き合い、ちゃんと表現できるようになる手助けができるといいなと思います。

もうひとつ、子どもにはどうやって怒るのが正解でしょうかと尋ねられることもあります。その度に思うのですが、怒り方の正解なんてないと思っています。私は3人の子の母ですが、怒り方が上手なお母さんでしたなどと嘘を書いたら、成人した3人から一斉ブーイングが来るでしょうから、偉そうなことは何も言えません。

ただ、思っていることは、「指導しよう」とか、「上手に怒ろう」ではなくて、子どもに「まじめに向き合う」大人でいたいということです。「嫌だ」と思うことは「嫌だ」と真摯に伝える。「大事だ」と思うことも一生懸命「大事」と伝える。子どもには大人が「真剣に何かを伝えたかったんだな」ということは伝わると感じています。子どもたちに届くのは、いわゆる善悪や押し付けの正しさではなく、大人を通り抜けた「本当のこと」だと信じるからです。